

海外渡航時の安全対策と危機管理

ブラジル・リオオリンピックおよびパラリンピックを契機として

伊橋 貴之 Takayuki Ihashi

リスクマネジメント事業本部

ERM 事業部 海外危機管理グループ

主任コンサルタント

はじめに

ブラジル・リオデジャネイロで4年に1度の祭典であるオリンピックおよびパラリンピック（以下「リオ五輪」）が、8月5日と9月7日にそれぞれ開幕する。ブラジルは、日本からも多くの企業関係者や旅行者が訪れる国であると同時に、治安悪化が著しいハイリスク国でもある。

本稿では、リオ五輪の開催を間近に控えたブラジルを例に、海外渡航時の安全対策や危機管理・危機対応について解説する。

1. ブラジルの国内情勢

1.1. 政治・経済等の概況

一般に政治・経済情勢の安定性は、治安状況に直結している。そうした意味では、現在ブラジルは政治・経済の両面において不安定な情勢が続いており、厳しい状況にある。

政治面では、今年5月にルセフ大統領の弾劾裁判が可決され、テメル大統領代行率いる暫定政権が発足した。しかし、政治的な緊張状態は継続しており、各陣営の支持者によるデモや衝突が相次ぐなど、政治的に安定しているとは言い難い状況にある。

経済面では、2015年のインフレ率が10.67%と高止まりする一方で、GDP成長率はマイナス3.62%となった。2016年に入り、通貨レアル安を背景とした貿易収支の改善やインフレ率の低下といった好材料も出てはいるものの、資源輸出の不振が長引いているため、先行きは引き続き不透明であると言わざるをえない。

テメル暫定政権が政治の安定化と財政再建に向けた取組みを進めているが、成功したとしても、社会にプラスの影響が及ぶのは当分先になることが予想される。ブラジル国内では、貧困や所得格差を背景とした犯罪やデモが多発しているが、こうした状況は、当面の間、続く判断すべきであろう。

1.2. 治安状況

ブラジルの治安は非常に悪化しており、大都市だけでなく地方都市でも犯罪が頻発している。しかも刃物

や銃を使用した凶悪犯罪が多い。例えば、人口10万人あたりの発生件数で比較すると、在リオデジャネイロ総領事館が公表しているデータによると、殺人事件は19.2件で日本の約23倍、強盗事件は1228.9件で約510倍にも及ぶ。しかも、現地警察のモラルや信頼性の低さから通報されない事案も多いとみられ、水面下では数倍に及ぶ事件が発生しているとも言われている。

外務省でも、現地の安全情報を頻繁に発信し、安全対策に注意するよう呼びかけている。在リオデジャネイロ総領事館では、これまでも安全情報をはじめ、感染症・医療、交通といった様々な情報を提供しているほか、7月26日にはリオ五輪の開催に向けた特設ページを開設して警戒を呼び掛けている¹。

1.3. リオデジャネイロの治安状況

リオデジャネイロには約1,000カ所以上とも言われる貧民街「ファベラ」が存在し、その人口はリオ市全体の約30%（約200万人）にも上るとみられている。有数の観光地であるコパカパーナや、日本人居住者の多いイパネマ・レブロスの両地区、日系企業が拠点としているフラメンゴ・ポタフォゴの両地区の周辺にファベラが点在している。ファベラでは麻薬組織・犯罪組織が強い勢力を持ち、貧困層に銃器や麻薬を拡散させており、リオデジャネイロ各地で頻発する取引や強盗やカージャックといった凶悪犯罪の要因となっている。



(当社撮影)

治安当局でも、2014年のサッカーワールドカップ、2016年のリオ五輪と国際的なイベントを控えていた2008年頃から、治安対策に取り組んでいる。ファベラに常駐する「軍警察治安維持部隊（UPP）」を設置して治安活動を強化したり、過去に幾度も軍や警察の部隊を投入した掃討作戦を実施したりしており、一定の成果を挙げている。しかし、麻薬組織等の抵抗も根強く、貧困や経済格差といった問題も解決していないことから、根本的な解決と事態の改善は遠いと言わざるを得ない。

2. 想定されるリスクと安全対策および危機管理

2.1. ブラジル渡航時の安全対策・危機管理の基本

渡航が決定した時点で、日本の安全意識や安全基準は捨てる必要がある。何よりも、現地で守るべき3原則「目立たない」「用心を怠らない」「行動を予知されない」ことを徹底することが望まれる。また、外務省の「海外安全ホームページ」や在外公館HP等の情報を事前に入手し、現地では慎重な判断と行動を心がけることも重要である。例えば、滞在先にはセキュリティの高いホテルを選択するなど、安全確保にかかるコストや労力を惜しまないことが必要である。

2.2. 一般犯罪への備え

ブラジルで最も警戒すべきなのは、いわゆる一般犯罪である。スリ・ひったくりや盗難だけでなく、刃物

¹ 在リオデジャネイロ日本国総領事館。“リオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピック リオ総領事館特設ページ。”, http://www.rio.br.emb-japan.go.jp/itpr_ja/rio2016.html, (アクセス日: 2016-07-26)

や銃器を使用した強盗や殺人といった凶悪犯罪も頻発している。銃器の所持は厳しく規制されているが、麻薬密売組織の抗争やファベラを拠点とする犯罪組織の活動等を背景に、銃器が蔓延しているのが実情である。

こうした環境に日本人が入り込む以上、基本的な対応方針として2点が挙げられる。

①危険に近づかない

海外における多くのリスク対策は「危機回避」が基本となる。事故や犯罪といったリスクの発生自体を個人が抑止することは不可能であるが、リスクを回避できるように日頃から努力することは可能である。事前に情報を収集し、現地では常に周囲 360° に注意を払って不審人物に警戒する。外出時は必ず複数人で行動し、徒歩移動は可能な限り避ける。ファベラのような犯罪多発地域を把握しておき、絶対に近寄らない。こうした基本的な行動を徹底することが重要である。

ブラジルでは、白昼の雑踏で強盗事件や銃撃事件が発生することがある。しかし、犯罪者に接近しなければ被害に遭う確率は大きく下がることを認識し、適切に行動することが重要である。



(当社撮影)

②生命を守ることを最優先する

不幸にして犯罪に遭遇した場合は、まず「生命よりも重要な財産はない」ことを念頭に置いた行動を徹底することが重要である。ここでは思考実験的なアプローチとして、ブラジルで多発している路上強盗を題材に、犯罪者の視点から対応上の注意点を検討したい。

犯罪者側は、当然ながら「確実かつ安全に」金銭や物品を奪いたい。そうなると、標的から「刃物や銃器で反撃される」ことや「顔を覚えられて後で逮捕される」ことを警戒する。つまり、襲われた側が「大声を出す」「急に動く」「抵抗する」「相手の顔を凝視する」といった行動をすると、危害を加えられる可能性が高くなる。

大半の日本人は殺傷目的の刃物や銃器とは縁遠い環境にあるため、どうしても「自分も相手も刃物や銃器を所持している」、つまり「反撃されて自分が死ぬかもしれない」という犯人側の感覚を見落としがちである。例えば強盗に襲われた場合、金品を渡せば危害を加えられずに済むケースが大半である。しかし、急いで靴や服の内ポケット等から金品を取り出そうとしたり、犯人に無断でポケットやカバンに手を入れたりした場合、武器を取り出そうとしていると勘違いされて攻撃される恐れがある。「自分の些細な動作が相手を刺激し、過剰反応を招く」と理解しておくだけでも、安全対策になることを認識しておきたい。

なお、スリ・ひったくり、殺人、あるいは最近多発している短時間誘拐 (Express Kidnapping) といった犯罪にも、様々な対策や対応の注意点が存在する。外務省が発行しているパンフレットや資料²、当

² 外務省 海外安全ホームページの「海外安全パンフレット・資料」のページ (<http://www.anzen.mofa.go.jp/pamph/pamph.html>) (アクセス日：2016-07-26) に掲載されている「海外安全虎の巻」や「海外赴任者のための安全対策小読本」等が参考になる。

社発行の損保ジャパン日本興亜 RM レポート³などを確認いただき、具体的な対処法を把握しておくことを推奨する。

2.3. 疾病への備え

ブラジルでは人畜共通感染症が多いことで知られており、特に蚊が媒介するジカウイルス感染症（ジカ熱）、デング熱、黄熱等が知られている。特に最近ではジカ熱が警戒されているが、妊娠中に感染すると新生児の小頭症を引き起こすとも指摘されているのは周知のとおりである。また、他の吸血性の昆虫やネズミを媒介とする病気、発症するとほぼ100%死亡する狂犬病、ウイルス性の疾患など、警戒すべき疾病が多くある。

個別の症状と対策⁴はここでは割愛するが、安全対策の基本方針は他のリスクと同様に「近寄らない（近寄らせない）」ことである。そのためには、感染症の媒介者を把握し、感染経路を遮断する必要がある。例えば、外出時に長袖シャツ・長ズボンを着用して肌の露出を避ける。虫除けスプレーを定期的に塗布する。こうした対策を徹底することで、吸血性の昆虫を媒介する感染症のリスクは大きく低減することができる。

更には、視野の広さや発想の柔軟性、連想力も重要である。例えば、ウイルス性の病気に罹患しないように「生水や水道水を飲まない」ことは知られている。しかし、そこから「水道水で作られている可能性がある氷」や「水道水で洗っただけの生野菜」の危険性まで想定できるかということである。

個別のリスクごとに安全対策を把握していることが理想ではあるが、現実的には困難である。そのため、限られた知識を最大限活用し、安全を確保する習慣を身につけておくことが必要だろう。

2.4. テロ

現在、テロの脅威が世界的な課題となっているが、ブラジルにおける大規模テロの危険性は相対的に低いと考えられる。最近頻発するテロの多くにイスラム過激派が関与しているが、ブラジルはキリスト教徒が約9割を占めており、宗教的・文化的・民族的な共通点に乏しい点が理由のひとつとして挙げられる。

もっとも、リオ五輪の開催にあわせてテロリストが流入する可能性も否定できない。現にブラジルでは、7月下旬に「イスラム国（IS）」に感化された過激派とされるグループが複数回にわたって逮捕されている。ブラジル当局も国内の警備体制を強化しているが、五輪開催に合わせてテロリストが流入する可能性は否定できず、一定の警戒は必要である。

3. 注意点のまとめ

ここでは、上記で言及した内容について、改めて記載する。ここで提示する項目は現地での安全対策・危機管理のごく一部であり、いずれも基本的な内容である。だが、基本であるが故に、常に徹底し続けることは困難な項目でもあるため、先に紹介した外務省や当社から発行している各種資料にも併せて目を通し、現地での安全対策に万全を期していただきたい。

³ 当社ホームページの「損保ジャパン日本興亜 RM レポート」のページ

(<http://www.sjnk-rm.co.jp/publications/report.html>) で公開している「バングラデシュ・ダッカにおける襲撃事件——事件の概要と企業の対策」や「無差別銃乱射事件に巻き込まれた場合の対策——パリ同時多発テロ事件を受けて」等を参照されたい。

⁴ 厚生労働省検疫所 FORTH ホームページ (<http://www.forth.go.jp/index.html>) (アクセス日：2016-07-26) を参照されたい。

<海外で安全に過ごすための3原則>

- 目立たない
- 用心を怠らない
- 行動を予知されない

<基本的な防犯対策>

- 危険な場所や不慣れな場所に近づかない
- 危険な行動（早朝・深夜の外出、単独行動等）をしない
- 犯罪に関する情報を収集して危険を回避する
- 常に警戒心を持ち、態度に示す
- 華美な服装や装飾品の着用は控える
- カメラ、スマートフォンを公共の場で不用意に使用しない
- 事故や災害に巻き込まれた場合や襲われた場合を想定し対処を考えておく
- 現金や貴重品等は分散して所持する
- 行動のパターン化を避ける

<強盗に遭遇した時の対応>

- なるべく動揺を抑え、冷静に対処する

- 犯人の顔を凝視しない
- 急がず、ゆっくりした動作を心掛ける
- 無断でポケットや懐、バッグに手を入れない
- 抵抗せず、要求された金品は素直に渡す
- 他人が襲われているのを見ても、むやみに助けに行かない

<感染症対策>

- 生水を避け、飲用には沸騰させた水かミネラルウォーターを使用する
- 生ものの喫食は避け、十分加熱されたものを冷めないうちに食べる
- 感染症を媒介する吸血性の昆虫を避けるため、虫よけ対策を講じる（長袖・長ズボン、虫よけスプレー、蚊帳等）
- 狂犬病の感染を避けるため、野犬や野良猫、コウモリ等の動物に近寄らない
- 黄熱、肝炎、破傷風、狂犬病等の中から、必要と思われる予防接種を受けておく
- マラリアの予防薬について医師と相談したり、常備薬を携帯したりしておく

おわりに

治安悪化やテロが顕著な地域は、その多くが「権力の空白地帯」である。政府や治安当局の監視や支配力が低いと犯罪者や非合法組織の流入や活動が容易になり、さらに経済の悪化や文化・民族・宗教の対立がそうした事態に拍車をかける。こうした点から考えると、ブラジルの政治・経済の状況が改善するまで、治安の悪化は当面続くものと考えられる。

今回取り上げたブラジルは世界的に見てもリスクの高い国であり、相応の警戒が必要であることは間違いない。しかし、本稿で取り上げたような注意点は、程度の差こそあれ、他国を訪問する際にも留意すべき内容である。海外渡航時の大前提として、自分の生命は自分で守るという意識を持ち、適切に行動できるように備えておくことが重要である。

参考文献

- ・ 独立行政法人日本貿易振興機構. “国・地域別にみる ブラジル.” 日本貿易振興機構, https://www.jetro.go.jp/world/cs_america/br/, (アクセス日: 2016-07-26)
- ・ 外務省 海外安全ホームページ (<http://www.anzen.mofa.go.jp/>) (アクセス日: 2016-07-26)
- ・ 在リオデジャネイロ日本総領事館 (<http://www.rio.br.emb-japan.go.jp/nihongo/>) (アクセス日: 2016-07-26)
- ・ 在サンパウロ日本総領事館 (<http://www.sp.br.emb-japan.go.jp/jp/>) (アクセス日: 2016-07-26)
- ・ 厚生労働省検疫所 FORTH ホームページ (<http://www.forth.go.jp/index.html>) (アクセス日: 2016-07-26)
- ・ 公安調査庁. “国際テロリズム要覧 (Web 版).”, <http://www.moj.go.jp/psia/ITH/>, (アクセス日: 2016-07-26)

執筆者紹介

伊橋 貴之 Takayuki Ihashi

リスクマネジメント事業本部 ERM 事業部 海外危機管理グループ

主任コンサルタント

専門は海外危機管理、ERM（全社的リスクマネジメント）

SOMPO リスクアマネジメントについて

SOMPO リスクアマネジメント株式会社は、損保ジャパン日本興亜グループのグループ会社です。「健康指導・相談事業」「メンタルヘルスケア事業」「リスクマネジメント事業」を展開し、特定保健指導・健康相談、メンタルヘルス対策、全社的リスクマネジメント（ERM）・事業継続（BCM・BCP）などのソリューション・サービスを提供しています。

本レポートに関するお問い合わせ先

SOMPO リスクアマネジメント株式会社

経営企画部 広報担当

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-24-1 エステック情報ビル

TEL : 03-3349-5468（直通）